



調査隊アイリータ惑星①
《恐竜惑星①》*Dinosaur Planet* (1978) アン・マキャフリー(酒匂真理子訳) 東京創元社(文庫) (12/19刊・¥400)

マキャフリーの三部作である。設定も、舞台も、登場人物・生物も、実にオーソドックスで、その点は安心できる。(逆に同時代性や、アイデアの新しさを期待してはいけません。)

調査隊が訪れた惑星は、謎に満ちていた。初めての探査のはずなのに、遙か古代に何者かがこの星に干渉している。何のためなのか。そして、母船との連絡が途絶えた後、隊員達の間には不安な空気が漂う……。とはいえ、本書ではまだ何も始まっていないのである。読み切りではない。登場人物の数が多すぎて、印象をまとめる間もなく、終わってしまったようだ。

意外に嫌いな作家ではない。(翻訳が初めて出た当時)悪評の高かった『ドラゴンの戦士』以来、とにかく反感は持っていないかった。何と言っても、(いい意味で)楽に読めます。長すぎるのはねえ、と思う作品も多いけれど、本書の場合は、ちょっと長さ不足なのかも知れない。一冊の長篇の第一部、という感じなのである。原書でも、第三部が未刊。まだ完結もしていないので、結論が下せるのもずいぶん先になりそうだ。